

## 甗の有溝把手 ～渡来人の痕跡を探る～

メモ) 鉄本 2020.08.29

甗は渡来文物の1つで、急速に日本文化に溶け込んだ炊事用品です。甗の半島における故地を探る場合、器形、蒸気孔、把手、外面のタタキ・ハケ・ナデ目の特徴に着目します。

### 5世紀代における畿内出土甗形土器の特徴

	器形	蒸気孔							把手			凹線	調整 外面 下端 ケズリ		
		口縁部		底部		円孔	円孔	円孔+円孔	円孔	上面	先端			下面	
		外反	直口	平底	丸底	台形孔	三角孔	2重～	1重	楕円孔	切込み			落とし	刺突孔
須恵質	タタキ	○	○	◎		○	△	○	△	○	○	△		◎	○
	タタキ	○	<○	○	△	△		△	○	△	○	○	○	◎	○
土師質	ナデ								△					△	
	ハケ	△	○	○	△				○	○					

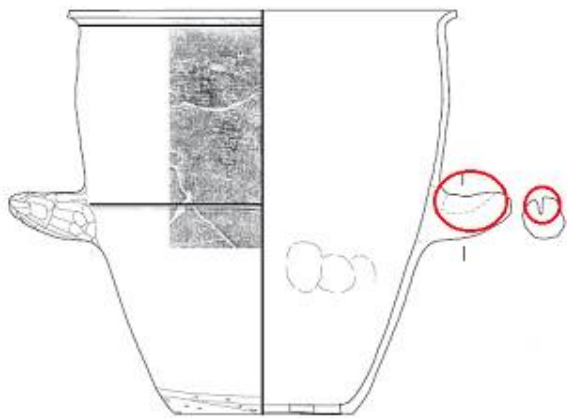
◎…ほとんどに共通する要素  
 ○…多い要素  
 △…少ない要素  
 空欄…ほとんど存在しないか存在しない要素

出典:「甗形土器の基礎的研究」  
 大阪大学文学部 杉井 健

甗が列島に定着化する過程にあつて、「受入れられなかった要素」の1つに「有溝把手」があります。「有溝把手」の甗が出土する遺跡には渡来系の人が入った可能性が高くなります。

当博物館の須恵器の展示コーナーにある甗の左右の把手に切込（溝）があることが視認できます。岡山理科大学の亀田修一教授は、これを「有溝把手」と称し「渡来人による切込」と位置づけています。この切込について同氏の発表文献（H31 講演記録「考古学からみた王権と渡来人」と岩波書店出版「渡来系移住民」）及び大阪歴史博物館の寺井誠氏の研究論文（研究紀要第12号）を参考にまとめてみました。

「有溝把手」 甗や鍋などの把手上部に溝が施されているもの。朝鮮半島の要素であるが、日本では甗そのものは普及したものの「有溝把手」は受入れられなかった。



把手上面の切込

「有溝把手」は、5世紀の甗には見られるが、4世紀のものにはみられない。また5世紀の甗のすべてに見られる訳ではない。

韓国の国立文化財研究所の許眞雅氏の調査によると、全羅道湖南地域の5世紀以降の甗には切込が見られるようになり、漢城百済流域圏の影響が考えられ、朝鮮半島においても、「溝」の有無は時期、地域によるものと思われる。

以上

日本における「有溝把手」の甗（韓式系土器）の出土例は、以下のものがある。

- ① 長原・八尾南遺跡（大阪市平野区）
- ② 剣崎長瀬西遺跡（群馬県高崎市）
- ③ 赤磐市南方遺跡（岡山県備前赤磐市）
- ④ 薬師の森遺跡（福岡県大野城市）
- ⑤ 在自三本松遺跡（福岡県宗像市）